「自律」「友愛」「進取」「創造」を校訓に掲げる町内唯一の高校。昭和38年に川本農林高校から全日制普通科として独立し、これまでに多くの人財を輩出してきました。この地にあって当たり前のように感じられますが、これまでの挑戦は数知れず。

この学校は今、多様な個性で溢れています。そのきっかけをさかのぼると、今年で10年目を迎える「飯南高校魅力化プロジェクト」に辿りつきます。

今月は、地域の魅力を学校の魅力に繋げてきた飯南高校の魅力に迫ります。

地域の魅力を高校の魅力へ

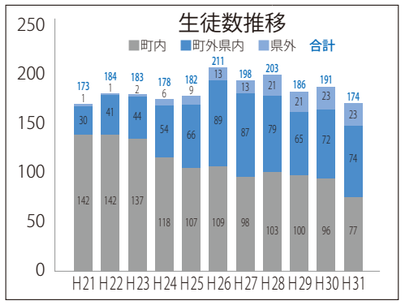
統廃合が目の前に

飯南高校の魅力は「少人数・習熟度別授業」。しかし、平成22年、この授業形式に暗雲が立ち込めます。原因は、平成23年以降の町内の中学校卒業生の急激な減少。1学年1学級になれば、教員の減少で、少人数・習熟度別授業や文系・理系の学習体制、部活動など教育活動の質を落としかねない事態に。さらに、町内の中学生全員が飯南高校に入学しても定員を満たせず、統廃合の可能性さえも懸念されました。

そこで、地域住民・教育関係者・有識者が立ち上がり「飯南高校キラリ！ドリームアップ思援会議」を設立。1学年2学級の維持、統廃合の危機回避に向けて協議を始めました。特に町外・県外からの入学生確保に向けて、通学対策や寄宿舎（月根尾寮）対策、奨学金制度の拡充をはじめとした施策提言がまとめられ、平成23年、魅力化プロジェクトが本格的に始動。

時を同じくして、県教育委員会の「離島・中山間地域の高校魅力化活性化事業」が始まり、県・町の後押しもあり強力に魅力化が進められました。

プロジェクト開始以降、順調に町内外からの入学者が増加。今では町外出身の生徒が全校生徒の半数を占めています。



未来を切り拓く力を

生徒数増加の兆しが見えてきた頃、高校の新たな魅力を探ることとなる転機が訪れます。現代社会は、急激なグローバル化や高度情報化、ニーズの多様化などで変化が激しく予測困難。この時代を生き抜くために、飯南高校では、主体的に課題を見つけ、さまざまな人と協働しながら、答えのない課題にも粘り強く向かっていく力を生徒たちに身につけてほしいと、「自らの人生を主体的に切り拓く人物の育成」を目標に掲げました。平成26年、飯南高校の新たな魅力として生まれたのが「生命地域学」です。

課題研究

建設業体験実習

中山間地域研究センター実習活動発表

赤名湿地探索

木材加工体験実習

①関わる力
多様な資源（モノ・コト）に関心を持ち、他者（ヒト）と協働する

②描く力
これまで得た知識や経験をもとに、自分や地域の未来を描く

③発信する力
地域・高校の魅力や課題、自らの考えや夢を発信する

生命地域学

自らの人生を主体的に切り拓く人物の育成

学びの場は地域に

生命地域学は飯南町を学びの場として、さまざまな体験学習や課題解決型学習を行う飯南高校独自の教育プログラムです。自らの人生を主体的に切り拓くために必要な「関わる力」「描く力」「発信する力」の3つの力を身につけます。

なぜ地域なのでしょうか。地域には、答えのない課題や魅力が溢れていて、生徒が自分や地域の未来を描くのにうってつけだからです。

飯南高校の竹内徹（とおる）先生は「具体的な魅力（ヒト・モノ・コト）や課題に触れることで、具体的なアイデアが描け、行動や発信につながる」と話します。

1・2年生は、飯南病院での地域医療学習や中山間地域研究センター実習などを通して地域の魅力や課題に触れます。3年生になると1組では「課題研究」に取り組みます。自分や地域の未来予想図を自ら設定し、その実現に向けた具体的アイデアを描いて行動。その成果を最終的に生徒や教員、地域住民に対して発信します。およそ半年を費やすこの授業で先生の出番はごくわずか。未来予想図の設定やスケジュールの管理は手助けしますが、未来予想図を実現する道筋や手段を考えるのは生徒です。これが生徒の自発的な行動を促すことに繋がっています。

「いろいろな切り口があって、それぞれに方法は違う。これには答えがないんです。だからこそ本人なりの答え（仮説）を見つけて行動（実験）してほしいです。これができる環境が生命地域学には溢れています」と竹内先生。

生命地域学に限らず、普段の授業から先生と生徒、生徒同士の会話が多くみられ、人と協働しながら自分たちなりの答えにたどり着くという光景が日常的にあります。高校時代のこのような経験が、社会に出てから生きてくるのではないでしょうか。次ページ、生徒の心境に迫ります。

笑いを交えながら授業を進める竹内徹先生